

## ◇箸墓古墳の変遷

「倭人伝」、「卑弥呼以に死し、大いに冢つかを作る。 径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人」

「崇神紀」、「倭迹迹日百襲姫、大物主の妻となる。・・ここに倭迹迹日百襲姫、薨りましぬ。

乃ち大市に葬りまつる。号けて箸墓という。・・大坂山の石を（手ごしに）運びて造る」

『史記』「武帝紀」、前八七年二月、武帝は長安西の離宮で七十年余の生涯を閉じた。祖父の文帝が霸陵（王の墓）を造るに際して、

「霸陵をおさむるに、皆、瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾ることなかれ。墳（土盛り）を治めず、省（節約）をなし、民を煩わすことのなきように欲す」

と詔したにもかかわらず、武帝は即位三年目から五十余年も費やして寿陵を造らせてきた。

茂陵と呼ばれるこの陵墓は、方二百三十歩、高さ四六尺もあった。当初に植えた木々が一抱えもある大樹に成長し、これを守る邑の人口が二七万人にも達していた。

☆高祖の墓より大きな茂陵には、彩色の施された棺槨の中に柩が安置されていて、その中に玉箱・玉杖ほか、武帝が生前愛用した六経の經典、数え切れない金銭財物が副葬されていた。

以後の帝は厚葬を戒めてきた。漢朝末期の成帝も自陵を品素に造り、こう詔したほどだ。

「徒に民を駆り出して陵邑を盛んにするは、天下人心に動揺を与えるゆえ止めるよう」

纏向（桜井市）には、纏向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、ホケノ山古墳、箸墓古墳など前方後円墳六基がある。その中で、三世紀中頃〜後半に築造された箸墓古墳が一際大きい。纏向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、ホケノ山古墳は、箸墓よりも古い時期の古墳とされる。

【箸墓古墳】、方形部がバチ形をした出現期の前方後円墳で、纏向の平地に築かれ、全長二八〇メートル、円径一五七メートル、高さ二五メートルもある。その規模は大和で第三位、全国でも一一番目だ。円

墳部は割石が五段に敷かれた石塚で、方墳部は葺石を覆い隠す形で二〇センチほど盛土されたらしい。

このように、円墳と方墳の築造形態が異なること、円墳上にあつた特殊器台形埴輪・特殊壺が吉備に由来する三世紀中頃とされる一方、方墳南端から採取された二重口縁壺は三〇〇年頃の吉備系土器だったことで、円墳と方墳の築造期が異なると指摘する向きもいる。

近年の方墳周辺の調査では、方墳部は二七〇〜三〇〇年頃の築造と判定された。

平成二十年八月には、前方部正面に幅六〇〜七〇センチの外濠跡が見つかった。周辺の発掘結果ともあわせるると、内濠・外濠を備えた古墳だったらしい。だとすると、国内最大の仁徳天皇陵（五世紀前半、全長四八五メートル）に匹敵する周濠が、三世紀中頃に存在していたことになる。

平成二四年六月、檀原考古学研究所は、ヘリコプターからレーザーを使って箸墓古墳を測量した立体地図を発表した。墳丘の段数は後円部が五段、前方部は三段と判明した。

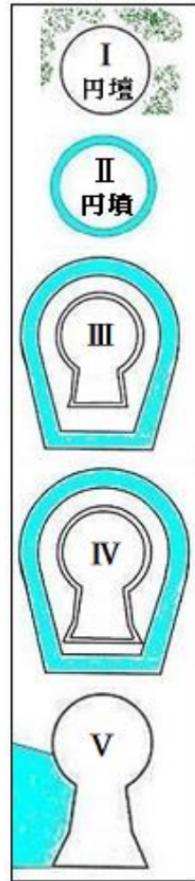
【ホケノ山古墳】、箸墓古墳の東に位置する全長八〇メートルの帆立貝形前方後円墳で、葺石と周濠を伴う。古墳時代前期初頭に造られた纏向型前方後円墳と見なされている。

副葬品や埋葬施設などから見て、出現期大型前方後円墳である箸墓古墳からあまり遡らない時期に造られた前方後円墳墓とされ、後円部中央から石囲いの木槨が出土した。



石囲いの長さは約七呎、幅約二・七呎、高さ一・五呎ほどあり、その内部に木槨が設けられ、コウヤマキ製の長さ五呎の木棺が納められていた。木棺内は、水銀朱で覆われていたらしい。副葬品・出土品として、大型壺、中型壺、銅鏃約六〇、鉄鏃約六〇、素環頭大刀一、鉄製刀剣類一〇、画紋帯神獸鏡一、二重口縁壺二〇（庄内式）などが残されていた。

箸墓古墳とホケノ山古墳の築造形態から推して、箸墓古墳は以下の五段階の改築が繰り返された後、現状に到ったと考えられるが、どう思われるだろうか。



## I 円形壇の築造（二四八、九年）

(1) 魏の役人張政が見守る中で百余人が殉葬されたことや、「倭人伝」に塚高さの記載がないこととで、当初のヒミコの墓は円壇と考えられる。

(2) 張政が纏向宮を去って伊都国に戻るや、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に遷された。ホケノ山古墳は、ヒミコの存命中に寿陵として造られたらしい。

☆箸墓古墳は、ヒミコの宮殿・上之宮（巻向駅北、辻・巻野内）の真南に位置する。真北には、黒塚古墳が鎮座する。この三点を通過する南北の古代道は、上つ道と呼ばれてきた。

## II 五段重ねの石積み円壇に造り変え（二五〇年頃）

(1)張政の帰国後（二五〇年頃）、円壇の周濠（内濠）を掘った残土で以て、五段重ねの石積み円墳に築かれた。その間、ヒミコの亡骸はホケノ山古墳に納められた。

(2)ヒミコの亡骸は、ホケノ山古墳から円墳最上段に埋葬された。その際、吉備に由来する特殊器台形埴輪・特殊壺が円墳上に副えられた。

### III 帆立貝形前方後円墳に造り変え（二六〇年代後半）

(1)トヨの朝貢後、外濠（幅六〇〜七〇<sup>尺</sup>）を掘った残土で、帆立貝形前方後円墳に造り変え。  
 (2)想像するに、火明饒速日はこれを泰山・梁父山に見立てて郊祭し、自ら天神（天照国照彦天火明饒速日）に昇ったのである。

『晋書』「武帝紀」、「秦始皇二（二六六）年十一月、倭人來りて方物を獻ず。南と北に円丘・方丘を併せ、一至の祀郊に合す」

(3)二七〇年代前半、女王トヨが三十五歳で逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に納められた。

☆大神神社は、ホケノ山古墳が豊鍬入姫の墓と伝える。

### IV バチ形前方後円墳に造り変え（二七〇年代前半）

(1)その数か月後、倭迹迹日百襲姫が逝去し、その亡骸はホケノ山古墳に仮葬された。

(2)バチ形方墳部が継ぎ足され、倭迹迹日百襲姫がそこに埋葬された。

(3)方墳表面が大坂山から運んできた石で覆われた。

★崇神紀に、箸墓が築かれた時の様子が記されている。ここから、崇神・火明饒速日（日本大物主大神）・倭迹迹日百襲姫が三世紀後半に共に生きていたと分かる。

【箸墓伝説】、倭迹迹日百襲姫は大物主神の妻となった。その神は昼には来ず、夜になってから現れた。そこで倭迹迹姫は、夫にたずねた。

「暗くてはつきり見えない故、今宵はお留まりください。朝方に、麗しいお姿を拝見したい

「ものです」

大神が答えて言うには、

「道理である。明け方に汝の櫛箱の中に入っていよう。わが姿形に驚かぬように」と。

姫が夜明けを待つて櫛箱を開けると、衣紐大の麗しい小蛇が箱に入っていた。姫は驚きのあまり叫び声をあげた。大神はたちまち人の形に戻って、

「汝は我慢できず、私に恥をかかせた。ここから姿を消すことで、汝にも恥をかかせようぞ」と言うなり、大空を飛ぶようにして御諸山に登り帰った。姫はそれを仰ぎ見て後悔したのか、腰の力が抜けて床にドスンと座り込んでしまった。そのとき、箸が体に突き刺さってみまかり、大市に葬られた。時の人はその墓を箸墓と呼んできた。この墓は、昼は人が造り、夜は神（三輪氏）が造った。大勢の人が大坂山から箸墓まで並び立ち、石を手渡して運んだ。

## V バチ形を伸長した前方後円墳に造り変え（三〇〇〇～三〇〇四年初め）

(1) 古墳の西を掘り起こし、ため池（大池）がつくられた。

(2) 濠内の水がため池に引かれた後、内外の濠とも、ため池を掘った残土で以て埋め戻された。

(3) バチ形の方墳部がため池を掘った残土で、さらに継ぎ足された。

(4) 女王トヨの亡骸も、ホケノ山古墳からそのバチ形部に遷された。

(5) 石葺きの方墳全体がため池を掘った残土で、うっすらと覆われた。

(6) 直後、二重口縁の壺形埴輪（三〇〇年前後の吉備系土器）がトヨの亡骸真上に副えられた。

★桜井茶臼山古墳の円墳・方墳上に靈時（天地五帝の神霊を祭る靈廟）が造営されると、箸墓円墳に眠るヒミコの亡骸が掘り出され、桜井茶臼山古墳の靈時に遷された。ついで纏向石塚古墳に眠る天照大神御霊も高皇産靈御魂として靈時に招来された

★靈時の周囲に、三〇〇年前後の吉備系二重口縁壺が並べ立てられた。